山茶の菌核病

原攝祐

山茶は伊豆七島を初め、伊豆本國にも其栽培は尠くはない、其種子は椿油を搾出し、其用途廣きものである、山茶の病害として、本邦で記載せられたものは甚だ尠い、白井先生の餅病 Efodasidium Camelliae を初めとし、煤病 Meliola Cawelliae 星形煤病 Asterina cincta 結病 Cryptovalia Camelliae Syd.et Hara 等が重なるものであるが、其花腐病、即ち菌核病に就ては、これを記述したものがない。往年予が鄕里に於て年々山茶が開花の時期に於て、恰も霜害に遇ひたるが如き狀を呈して落下するものがあつた、げれどもこれが病原を尋ることが出來なんた、勿論菌核病であろうと、ほゞ見當は付けて居つたから、其木の本で予實体を採集すべく注意を拂つて居つた結果遂に、昨年に至り菌核を形成し、其菌核より子實体を抽出する事を發見して、往年花腐病として注意して居たものも病原明かとなつた次第である、本縣では未だ發生を聞たことは無いけれども、所在に發生して居るであろうと思ふから、若し花が早く萎凋して結實することが無い場合には御通知に接したいものである。

症狀 春季開花に前ちて花蕾が萎凋して落下する事があり、又方に開花せんとする間際に蕾の先端褐色に變じて落下す。開花する場合にも普通の花の如く大ならず、其狀恰も霜害に遇ひたるが如く、花片の先端褐色に變じ花全部直に枯死凋萎して後に落下す而して、其變色は通常花瓣の先端よりするが如き感あれども多くは、調査すれば既に、其莖部は褐變腐敗し纖細なる白色絹絲狀のものが蔓延するものあるを認むることが出來るのである。

病原 病原は一種の寄生菌即ち菌核病菌の寄生に原因するものである、其病原菌の學名を Sclerotinia Camelliae Hara n.sp と云ふものである。

菌核は落下し地中にある、蕾又は花中等に形成せらるゝ、楕圓形豆狀又は不規則形であつて、其表面は圓く、下面は凹面をなして、居る大さ二乃至五分位あり、暗色である子囊盤は一菌核より一乃至十本位抽出す、初め棍棒狀であるけれども、後頭部椀狀に開き中央に小點がある、直徑一乃至五分位ある遂には漏斗狀となり暗褐色にして、其面白粉を撒布したるが如し長き柄あり柄は圓筒形であつて色稍濃し、長三分乃至一寸五分幅二乃至四厘位あり、子囊は子囊盤の漏斗狀をした表面に叢生する圓筒形又は棍棒狀にて頂端圓く莖部に小柄あり、八個の胞子を一列に含有す、長さ一二〇乃至一四〇幅六乃至八「ミュー」あり胞子は楕圓形卵形又は圓筒形で兩端に圓く且つ兩端油球一個宛を有し無色なり長徑八乃至一一短徑四乃至五「ミュー」あり。

大正七年四月二十一日岐阜縣惠那郡川上村にて採集予は此菌を Sclero Tinica 屬中分生胞子を有せざる程度に比較した、ところが之れに相當するものを見出すことが出來ないのみならず山茶に寄生する Sclerotinia 屬の菌類が無いから予は之れを新種と認めて山茶に寄生するから Sclerotinia Camelliae Hara. n.sp と命名し和名は花腐病と稱するが症狀に當合するけれども一般の菌核病と名を等しくなさしむるを以て和名整理と適當と認め山茶の菌核病とした。

驅除豫防法

本病は陰濕地に多く發生するものであるから新に植付の場合には是の如き地を避けねばならぬ

秋末一回春季開花前一回ボルドウ液を撒布する事被害の花は莖部より切り去り燒却する事

地下の菌核及子實体は集めて燒却する事

似而非講話會

講話會を開て聽衆の少い程主催者の苦痛な事は無い定刻か來て僅に十二三人位が會場の片隅で『モー來る人は無だらか』とか今日の天氣が續けば良いがとか、『今年は仕事を遲らかして忙しい』とか『誰さんの病氣はどうだい』等とサモ体屈ろうに欠伸したり煙草を吹たりして居るのか、主催者に取ては中々痛い又一方講師の控室でば講師がイラ〳〵しながら苦るしい催促が十分間か五分間にある。此時分は主催者の頭からは湯氣が立つてシッとしては居れぬ、聽衆を騙り立にコッソリ廻した人足は愚頭〳〵して居る先生に賴んだ小學校の上級生も三四十分立ねば授業の終にならぬ。更に青年會長に交渉の使を出す村内の隱居連へ使を立る講師をあしらい乍らの仕事としは大變な苦痛で蓋し其事は尋常なでい其内ヤット三々五々に見へ始たのは七十以上の老人と十二三の腕白鼻垂のみであるソレデハどうゞと講師を請じても講師は講檀から聽衆の顏觸を一瞥してソーして何が話せやうかこんな講話會はドンナ欠點から出來るものだが主催者たる者大に研究せられよ。（笠堂生）